ななほしてんとう

萌百合

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ななほしてんとう

【Ｎコード】
Ｎ２５５５Ｈ

【作者名】
萌百合

【あらすじ】
悩みの多い受験生生活にうんざりした、小学６年生の薫一。塾の人気者、野崎絵那ちゃんに会えなくなるのは惜しいが、絵那ちゃんが企画したスキー大会で自殺を試みる。しかし、失敗して絵那ちゃんに助けられ……。シリアスに始まる恋物語も、筆者的にはアリだと思います。

第一章　華麗なる自殺計画（前書き）

二作目です。私が６年生の時に同じような状況下に置かれ、妄想した話です。多少うざいかもしれませんが、何卒よろしくお願いします。

第一章　華麗なる自殺計画

もう死んじゃおっかな。
そう思ったことも少なくない。
６年後期から成績伸び悩んでるし。
取り柄ないし。
中学受験なんてしたくないし。
だいたい生きて塾行くだけの生活なんて意味あんの？
本当に死んじゃおっかな。
栗原薫一（くりはら たいち）なんて、儚くこの世から消えてしまえばいいんだ。
そんな感じで毎日が虚ろだった。
…唯一楽しみなことがある。
塾の人気者、野崎絵那（えな）ちゃんに会うことだ。
もちろん、プライベートで会うわけではない。
だが、塾で女の子には優しく接して、男の子には顔を近づけ下の名前で話しかける絵那ちゃんは嫌いじゃない。頭の中に、学習したことと親切と平等しかなさそうに見える。
塾も学校も同じクラスの北村（きたむら）なんて、学校では
「好きな奴なんていないし。」とか言ってるくせに、塾では、絵那ちゃんに話しかけられるだけでデレデレになっている。
そんな姿を見て、思わず吹き出してしまった程だ。
俺の絵那ちゃんへの気持ちは、みんなほど強烈ではない。
ただ、横に居てもらえるだけで、何となく幸せになれるだけだ。
絵那ちゃんのおかげで仲がよすぎる塾のクラスは、なんとＸｍａｓ前にスキーに行くことになった。
出費は各家庭からだが、親も気前がよく、簡単に出してくれた。
もともと塾に行かせるくらいだから、お金もあるのだ。
俺はそこで自殺する計画をたてた。といっても、そこまでおおっぴらにはやらない。

「トイレ行ってくる」と言って、そのまま雪に埋もれていればいい。
いつしか身体は冷たくなって、帰る場所は違うところになるだろう。
でも、さすがに死体が捜されないのは俺でも寂しい。、と思うたびに、絶対に心配してくれる絵那ちゃんを有難く思うのだ。
これも一種の恋心なのかな。

第二章　お前は黙ってろ（前書き）

第二章まで行きました！！微妙に嬉しい＾＾

第二章　お前は黙ってろ

決行の日が来た……
なんていっているだけで、俺が死んだところで大きなことは起こらない。
とにかく今日は
スキーの日＝自殺の日
なのだ。
朝、早速集合場所の塾にむかう。
途中、うかれきっててうざったい北村にあった。
あいつは、朝から
「絵那ちゃんいないかな～」
とにやにやしている。
バーカ、方向違うんだから行き道にはいるわけないじゃん。
と、笑い飛ばしてしまいたい気もするけど、
今日絵那ちゃんにあったら、１度もそれより先は会えなくなってしまうのだ、
ということが気になって、笑い飛ばせなかった。
神妙な面持ちで黙って歩き続けたら、北村に、
「おーい、薫一、マジで大丈夫？今日スキーだぞぉ？楽しくないのかぁ～？それとも、今日は何か大事なことがあるのかぁぁぁ～？」
と言われた。語尾がうざい。
半分当たってる、と心の中で苦笑して、俺は
「考え込んでただけ～。残念でしたぁ～！」
と答えた。
そういえば、昔も同じようなことがあった。
俺はあんまり喋るタイプじゃないから、
「薫一くんって…何考えてるか分かんない。」
と言われたことがある。

だから、勘違いされまくって、
「あいつ、むっつりスケベなんだぜ、きっと。」
とか、
「常に勉強について考えてるんだよ、あいつは。」
とか言われた。
俺は何歳になっても、どんな場所でも、勘違いされやすい性格らしい。
もっとも、北村に今の俺の気持ちが分かったらすごいけどな。

第二章　お前は黙ってろ（後書き）

実は文字数が足りなくて、いっぱい付け足しました…。

第三章　終わりは終わりでこれからは何も残らないと俺は信じたい

塾前にはもう数人の女子と、一人だけ男子がいた。
女子の中心には、やっぱり絵那ちゃんがいる。
これでこの塾も見納めだ。一人だけいた男子は、菊鹿流時（きくがりゅうじ）という名前で、本人によれば
「よくみりゃイケメン」
それって、よく見なければイケメンではないという自覚の現れではないだろうか。
そんな言葉を聞くのも、これからはもうない。
それはさておき、流時は俺たちのところへ近づいてきた。
「参るなぁ。」
と言いたげな表情で。
妙に確信が生まれた。
こいつは、俺たちが来るまで、女子に囲まれてウッハウハだったのだろう。
「薫一も北村もおせー。」
「なんだと！？お前が早すぎるんだよ！な、薫一。」
「んだとゴラァ！！俺はいたって普通だ！」
俺たちは結構仲が良い、というよりは一緒にいるから、他の人たちから見れば
〔仲睦まじい三人組〕に見えるんだろうな。実際、北村と流時はそうだと思ってるんだろう。
でも、こんなにも
流時→北村→流時→北村→流時→北村……→俺
みたいなターンの繰り返しばかりだと、俺はそうは思えなくなってくる。
まぁ、このターンも、今日でおしまいだ。
終わりが早く訪れてほしい。

大抵、早く終わってほしいものは、いやになっているものだから。
言ってしまえば、中途半端で煮え切らない自分の性格とか、絵那ちゃんに積極的にならない性格とかも含めていやだ。
早くバスが来て、この苦痛の時間が終わればいいのに。

第三章　終わりは終わりでこれからは何も残らないと俺は信じたい（後書き）

同じ日に二章と三章を投稿してるっていうのも変な話ですが、それは私が携帯で書いたものをメールでパソコンに送信し、コピペして貼り付けているからです；これからもよろしくお願いしますｍ（＿）ｍ

第四章　酔うからってバスの座席窓際にする奴は大抵たいして酔わない

「うっぷー。バス酔ったぁ～。薫一、頼むから窓際代わって！」
窓際とは俺の座っている座席であり、要するに絵那ちゃんの隣だ。
「無理。他の窓際席も男子ばっかりなんだし、近い奴に代わってもらえば。だいたいバスの右上と左下で交代なんて出来るわけないじゃん！！」
たまたま俺の超近くに、頼んでおいたバスの入り口が来たから、俺はバスの左下に座っている。
絵那ちゃんは、女子の譲り合いとやらで二番目に入ってきた。
だから、俺の隣だ。
「だったら私が代わってあげようか？？どうせあんたたちは絵那の隣に座りたいだけでしょう？」
ちなみにバスの一番後ろは、
俺→絵那ちゃん→その他女子三人
となっている。
今発言したのは、よく分からないがど真ん中の番長席に座っていた田中緋咲（ひさき）なんだろう。
「いや、さすがに右も左も女子っていうのは……なんていうか……」
興奮する？幸せ？
どうせ嬉しいだろ、逆にお前は。
「ねぇ、やめない？せっかくのスキーなんだし。ねっ、絵那ちん。」
「そうだよ、みんな盛り上がろうよ！！」
絵那ちゃんがはにかみ気味の人懐っこい笑顔を見せると、バスの中に笑いがあふれる。
絵那ちゃんの凄いところは、こんな風に盛り上げられるところだと思っている。
そして、絵那ちゃんは言った。

この中に、今日命を断つ予定の少年がいることも知らずに。
「受験終わったら、もう一度どこか行こうね！」
純真とは、時に刃のように人を傷つける。

第四章　酔うからってバスの座席窓際にする奴は大抵たいして酔わない（後書き

緋咲という名前はうちの姉のあるＰＣゲームでの飼い主名です。

第五章　スキー場の雪は八割が人工だと誰かが言っていた（前書き）

題名が酷くてごめんなさい。

第五章　スキー場の雪は八割が人工だと誰かが言っていた

スキー場に着いた。
はっきりいって寒い。
自殺するとはいえ、死ぬまでに苦しむのはごめんだ。
だから俺は、自分の昼食に、薬局で買った睡眠薬を混入させるつもりでいる。
寝てる間に死ねたら、きっとそれは楽だと思う。
準備は万端だ。
トイレの位置はもちろん、どのタイミングでどんな台詞をいうか、すべて考え、確認してある。
絶対に、大丈夫。自分に言い聞かせる。
「流時、着膨れてない？」
北村が言った。
「いや、これが適度な防寒なんだ！」
弁解しても、やっぱ見た目はダサい。
北村は赤のダウンベストを着ている。
珍しくなかなか似合っていて悔しい。でもメガネが曇っている。
笑える。
俺、死ぬ前なのに。
「うわぁ、栗原のベスト格好いいね！」
田中緋咲が言った。
「そ、そう？ありがと…」
俺はスカイブルーのベストを着てきた。店頭で一目惚れ（？）したものだったので、微妙に嬉しい。実は俺がこいつと心中するのだということを、田中は知らない。
褒めてくれるのが絵那ちゃんだったら、もっと嬉しかっただろう。
「とにかく、昼食にしよっか。」
「うん。絵那のお母さんが手配してくれてるんだよね。」

「そうなの。温か～いカレーだよ！」
『やったあ！』
恐らく全員がハモった。
俺を除いて。
「ハッピーアイスクリーム！」
誰より速く、たぶん幸せを誰より山ほど持っている絵那ちゃんが言った。
懐かしい響きは、雪山に吸い込まれていった。

第五章　スキー場の雪は八割が人工だと誰かが言っていた（後書き）

まだまだ続きます。でもどれくらい続くかは未定…。行き先不安です。

第六章　山小屋の飯は美味いのが３０％、不味いのが７０％

昼食のカレーはとてつもなく美味かった。
さすが絵那ちゃん。
の、お母さん。
前、ノリでやってみたお試しスキー教室で食べたちゃんこ鍋は死ぬほど不味かったから、俺は山小屋のイメージが激変した。
っていうか、ちゃんこ鍋に入っていたキノコが駄目になっていたのかもしれない。
そういえば
「雪山は自然界の冷蔵庫」
とか言ってる人ばっかりだったしな。
「うー、食った食った。」
三木っていう腹の出た奴が、その出た腹をさすっている。
大食いのあいつが腹いっぱいなんだから、相当のおかわりの量が用意してあったのだろう。
そういうとこもちゃんとしている。
かなり感嘆した。
頃合いを見計らって、俺はそろそろだ、と思った。
「じゃあ俺、トイレ行ってくるから。」
予定通りの台詞を、予定通りみんなが立ち上がるより先に立ち上がって言う。
みんなが納得するように、バスでは一回もトイレに行っていない。
「トイレは外よ。気をつけてね。」
山小屋の人が教えてくれる。それはとっくのとうに調査済だ。
ただし気をつけるもなにもない。行く途中で足を滑らせて死んでも、本望だ。
でもそれは自殺にならない。
「そうだな。薫一、一回もトイレ行ってなかったから、ついに限界

なんだ。玄界灘(げんかいなだ)。」
北村は、ただでさえ寒い雪山を氷結させた。
しばらく間があったが、みんなは笑顔で言った。
『いってらっしゃい。』
みんながこぞって送り出してくれた。
俺を死への旅路へ。

第六章　山小屋の飯は美味いのが３０％、不味いのが７０％（後書き）

玄界灘…我ながらコレ言ったら結構シラけると思います。

第七章　いい歳してるのに雪を見て興奮してしまう（前書き）

ついに、薫一の自殺シーンです！
はっきり言って、ここからが第一章みたいなもんです。

第七章　いい歳してるのに雪を見て興奮してしまう

あたり一面雪。
こんなにも綺麗な銀世界だと、醒めた俺ですら興奮させてしまう。
足を滑らせてしまえば簡単に自殺できるものの、やっぱり本能的に、
雪に滑らないように、慎重に歩いてしまう。
人間っつーのは、なんてめんどくさい仕組みになっているんだ。
俺の嘘の目的地、トイレが見えてくる。
小汚くて、おそらく和式トイレだ。
離れているここからでも、悪臭がしているのがわかる。
しかも二つも入らないんじゃないか、という狭さである。
嘘でもここには来たくないわ。
でも、こんなトイレも「嘘の目的地」とか表現すれば格好よく聞こえるもんなんだな。
俺はその汚いトイレを素通りして、さらに奥へと進んでいく。
まゆばい光を放つ雪と、それと対照的な、どよんとした気分の中で、
俺は考えた。
普通、人間というのは自殺する時は何も考えられず、無感情になるものだと俺は勝手に思っている。
なのに、俺、感情ありすぎじゃないか？
これって、なんかの暗示じゃないだろうか？と思う。
例えばほら、北村に見つかって馬鹿にされるとか、目覚めたら生きていたとか、とにかく自殺に失敗するかっこ悪い俺。
いやな予感がする。
とにかく、トイレが点より小さくなってきたので、ここら辺かな、と思って立ち止まる。
もう、そのトイレ以外は何も見えない。
一面白である。
こういう場所が理想的だ。

誰も来ないし。
適当に新雪に手を突っ込み、足が入るほどの穴をあける。
慎重に足を突っ込んで、穴を広げていく。
頭の裏まで雪があるのを感じる。
さっきまで掻き出していた雪を、今度は自分の上にかけていく。
冷たい。が、我慢している。
しばらくしたら、自然と睡魔が襲ってきた。
今がチャンスだ、と思って、俺は睡魔に身を任せることにした。

第八章　初恋の魅力はこの恋がいつかは終わるということを知らないことだ

目が覚めた。
ってアレ？
俺って…死んだんじゃなかったっけ。
上から誰かの泣き声が聞こえる。
ホラー映画か、これは。
雪の融けたような水滴が顔についているらしい。
つまり、俺は生きている。
ゆっくり目を開けてみると……なんと１０センチも離れていないところに、絵那ちゃんの顔がある。
「わっ」俺が叫んだ。
「ひっ」絵那ちゃんが飛び退いた。
「薫一…くん？」
「絵…絵那ちゃん……」
「生きてる…よ、よかったぁ…」
絵那ちゃんは大泣きし始めた。
絵那ちゃんこそ大丈夫なのか？
しばらくして、絵那ちゃんも俺も落ち着いたころ、絵那ちゃんは、俺に今までのことを説明してくれた。
どうやら、俺がなかなか帰ってこないことを心配して、絵那ちゃんだけが捜しに来てくれたらしい。
トイレからは一切音が聞こえなかったから、奥まで進んで行ったとき、何かに躓いてこけた。
それが、自殺願望丸出しの俺だった、というわけだ。
あわてて雪を掻き分けると、死ぬ寸前の俺がいて、心優しい絵那ちゃんは、助けもよばず大泣きしていた。
その時、俺が少し動いたような気がして、顔を近付けていた。
そしたら、俺が目を開いて、さっきのシーンになるわけだ。

結局のところ、俺は自殺に失敗してしまった、というところか。
かっこわるい&やっぱり&ありがとうの感情が微妙に入り交じった。
ただただ疲れていたので、馬鹿な俺は後先考えず絵那ちゃんを抱き締めた。

第八章　初恋の魅力はこの恋がいつかは終わるということを知らないことだ（後

きました！ラブシーン。

一応これ、ラブコメですからね（・ω・、）

第九章　好きでもない女子とデー　トしたら好きになるってアレ、意味不明

絵那ちゃんは、俺に抱かれたまま硬直していたが、しばらくして
「…たっ、薫一くん？」
「ん？」
「たぶん、そろそろみんな捜しに来てくれると思う…」
「あぁ、そうだな。」
俺は絵那ちゃんを離した。
絵那ちゃんの予言通り、『絵那ちゃん目当てに』みんながやってきた。
北村がいった。
「絵那ちゃん！こんなところに…あと薫一も……。」
「で、なんで薫一はなかなか帰ってこなかったんだ？」
流時が続けた。
俺が白状しようとしたとき、絵那ちゃんが言った。
「あのね、トイレの位置を探して歩いてたら、行きすぎてさらに雪の穴にはまっちゃったんだって、一瞬死んじゃったかと思ったの。」
「そりゃ、あたしらだってそう思ってたよ。」
「無事でなによりだな、絵那ちゃん。……と薫一。」最後の北村の言葉はムカついたが、かばってくれた絵那ちゃんに感謝だ。
「俺も大変だったんだぜ。寒くて、どこにいるかすら分かんなかったからな。絵那ちゃんに感謝だよ。」
素直な気持ちで、嘘を生クリームのように添えて、俺は言った。
「とにかく、戻ろう。」

拒絶されなかった。
それが、山小屋に戻ってさらに正気に戻った俺が考えた唯一のことだった。

俺……いけるかも。
勝手に意味分からないことを考えてみたり。
好きでもない女子とデートしたら好きになるってアレ、意味不明だけど、この原理があるなら、絶対に絵那ちゃんは俺が好きになるはずだ！！とそれこそ意味不明なことを考えたり。
そっから先の俺の心は、雪山にはあり得ない暖色の花が咲き乱れていた。

第九章　好きでもない女子とデート　したら好きになるってアレ、意味不明（後

薫一くんはホントに扱いやすいキャラで嬉しいです（・∀）／~~

第十章　楽しいのはその場だけであとは切ない

スキーは何事もなく、無事に終了した。
もちろん、死者はいない。
行方不明者もいない。
いるわけないのは当然だ。
みんなは、ここで死のう、迷子になろうなんて考えてるわけないんだから。
スキーの怪我人もいなかった。
ここにスキーのことをくわしく書いてもいいのだが、そっちに気をとられると困るので、あえて書かない。
実を言うと、全然覚えてない。
絵那ちゃんのことで、頭がいっぱいだったからだ。
ただ漠然と楽しかったのは覚えているけれど、それも絵那ちゃんを抱き締めた感覚が、まだ生々しく身体に残っていたからかもしれない。
俺って、昔、噂で言われていたように案外エロいのかもな。
てか、なんであんなに腰まわりが細いんだろう。
なんであんなに、柔らかい身体（特に上半身）があるんだろう。
なんであんなに、暖かい息を吐いているんだろう。
こういう疑問を続ければキリがない。
つまり、実に小学６年生らしい、エロくて素朴な疑問だったわけだ。
なんでこんな幼稚なんだろうな。
とにかく、俺はあの出来事、絵那ちゃんを抱いたことで、自分が絵那ちゃんを愛していたことを自覚してしまったわけである。
この自覚＝エロい発想（というか妄想？）＝愛
なのである。
そんな大袈裟に呼びまわるほどでもないのかもしれない。
でも、小学６年生の、さらに

年齢＝彼女いない歴
の一般的な俺にとっては、好きな子を抱いただけで、勝手な妄想へ
と誘われてしまうのである。

第十章　楽しいのはその場だけであとは切ない（後書き）

薫一がおかしくなっちまいましたね（゜∀゜δ）
すいません。

第十一章　只今改装セール中（前書き）

だいぶ久しぶりの投稿です。
てかっ、最新の三話、誰も読んでないってひどくね！？
まぁうちの書く話がオモロないのがいけないんやけどー。
なぜか関西弁。

第十一章　只今改装セール中

それから先の塾での俺は…ひどかった。
絵那ちゃんと隣になるために成績を上げようと勉強をがんばったり（上がったらいろんな意味で本望だけどな）、でも気がつくと絵那ちゃんのことを考えていたり――
要するに妄想の常習犯になってしまったわけだ。
ふわふわした気分でいられるが、どうしようもない奴になっちゃったとも思っている。
学校ではニヤニヤ笑いを抑えるのに必死だったしな。
今となっては絵那ちゃんのいない暮らしなんて想像もつかないし、でも逆に、絵那ちゃんに巡り合わなかったら、今頃俺はどんな奴だっただろうとか考えてしまう。
頭の中にあるお店は、突然の大量な来客に戸惑っている、とでもいったところだろうか。
それとも、今まで通いつめていた理性という常連がいなくなって、混乱しているだけなのだろうか。
どっちにしろ、結果として俺の空っぽな脳みそも、わがまま言い放題の感情（こころ）も、暖かく柔らかな、優しいもので充たされたのだから文句は言えない。

あれ？
これが…愛とやらか？
なんだか不思議な感じだ。

本当にめぐるましく、体がフル回転していることを実感する。
デパートのように、余計なものを捨てて、新しくて、自分に必要なものを取り入れていく。
きっと、今まで俺が抱えていた闇はいらないもの。
絵那ちゃんへの気持ちはいるもの。
つまり、俺は……――――――――
死ぬ理由（わけ）など、すっかりなくしてしまったのだ。

第十一章　只今改装セール中（後書き）

正直いろんな意味でつかれた。
書いてるのは楽しいんだけどさ。

第十二章　押してだめなら引いてみる？（前書き）

前回の前書きはどうもすみませんでした。

第十二章　押してだめなら引いてみる？

塾で、俺は、ちょいと度がすぎてしまった。
要するに、だ。
自殺しよーとしていたところを助けられて、抱いたのに抵抗されなかったからイケると思い込んで、やりすぎて嫌がられちゃいました。
（小１口調で！）
今は反省してるけど、あの時のことをここで話そうと思う。
あの日は……俺は塾の席順表をみて愕然とした。俺は、三列目の真ん中だったのだが、前にいくほど成績が良いからそこまではいつも通りである。
――なんと、あの成績優秀な絵那ちゃんが隣の席だったのだ。しかも、俺より成績の悪い席で。
俺が驚きを隠せないでいると、教室外で先生に質問していた絵那ちゃんが帰ってきた。
開いた口がふさがらない、といった様子の俺を絵那ちゃんは見て、そして俺に
「あ…今週はテスト受けれなかったの。……寝坊して！」
悪戯（いたずら）っぽい口調が可愛（かわい）らしい。
「そうだったんだ…」
基本的に、成績の悪い俺はクラスの一番後ろである。
だから、普通は他校舎で受けるはずのテストを、他の成績の悪い下のクラスの奴らと一緒に自分の校舎で受けなければならないのだ。
絵那ちゃんのことなど知れないのだ。
しかも、だ。
クラスの人数は１４人だから、一列６人で三列目は２人きり、という状態にいつもなる。
今週は…俺と絵那ちゃんが隣じゃあぁぁ！しかも二人席で！
願ったり叶ったりだ。

俺の成績は上がってないがな。
そして、思わず…
俺は、絵那ちゃんを露骨にいやらしい目で見てしまった。
見てから、ヤバかったことに気がついたのだが、幸い絵那ちゃんは気がついていないようだ。
た、助かった……。
さらにその後、二人きりの三列目で！
絵那ちゃんの手を、握ってしまった…
終わった、ってこれのことだよな。
やってしまってから、絵那ちゃんをチラッと見ると、あのスキーの時もしていたであろう困惑した表情を浮かべていた。
俺は気がついた。
絵那ちゃんは俺を拒絶しなかったのではない。
人が善(よ)すぎて、どう断ればいいか判(わか)らなかったのだ。
こんなことがあったのだから、暫(しばら)くは、俺はおとなしくしておかないとな。

第十三章　引いても駄目ならスライド！

絵那ちゃんに迷惑かけないように、離れてからもう十日。

当然のように大晦日はすぎ、あっという間に正月も終わって、今度は塾の冬期講習も終わる。

となると、受験なんて…もう目の前だった。

だから、逆に絵那ちゃんにあまり固執しないで、今はこのくらいがいいのかもしれない。

俺に何か望めるなら、
「一緒に受験を頑張る」
ことくらいだった。

だいぶ醒めたな。と思うかもしれない。でも、十日間だけなのだから、こんなに醒めてしまったわけはない。
醒めたのではない。
心の奥でちゃんと、共に受験を乗り切り、連帯感がうまれた俺と絵那ちゃんを思い描いていた。
あくまで連帯感だ。
そこから先がどうなるかは、絵那ちゃんの反応次第だ。
結局、選択権はない……
なんて言うのは
「らしくない」

けど、つくづくそう思う。

あの日、俺の隣の席の綺麗な白い手を見たら、握らないわけにはいかなくて、その後で見た困った顔に、胸が痛くて……

全部俺のせいだ。
それはよくわかってる。
我慢していたら、どんなによかっただろう。

それを考えるほかに、俺に出来ることは勉強だけだった。

これって、よく考えたら、
「押して駄目なら引いてみな」
の「押す」でも「引く」でもなく……
言うなれば、「スライド」ってところか。
そんなことを考えて、俺は独り笑いをし、馬鹿だ、と自覚する。

そんなこんなで、クリスマス前の
「合格する」
という目標は日に日に達成に近づいていった。

第十四章　果たしてスライドできるのか（前書き）

長い間更新してなかったね、うん。次から頑張ります。

第十四章　果たしてスライドできるのか

聞け！聞いてくれ！

スライド式への近道があらわれたんだよ！

なんと……俺は、塾のテストで初めて一位になったのだ！

しかも、隣は絵那ちゃんときている。

すごいだろ、な？

一気に仲直り…したいけどそんなに俺は器用じゃない。

女子を一発でグッとこさせることも、うまく少しずつ心を動かすなんてことも、出来ない。

だから、『謝る』。

そのまんまの意味だ。

俺は絵那ちゃんに謝る。

あのスキーの日、突然抱き締めてしまったことを。

隣の席で、絵那ちゃんの手を握ってしまつたことを。

すべて洗い流したかった。

馬鹿な自分にけじめをつけたかった。

そして…

＊

ほとんど集中できない授業が終わり、休み時間になる。
といっても、この休み時間は5分しかないので、大抵の奴は必死でノートの続きを書いてから、そのままのんびりする。

だから、絵那ちゃんが席を外してしまうという最悪のパターンは考えられなかった。

俺は、ちょうどノートに最後の『。』を書いた絵那ちゃんに声をかけた。

「……あのさ」

「…なぁに。」

絵那ちゃんの瞳をじっと見つめて、俺は言った。

「ごめんな、いろいろ。」

絵那ちゃんの緊張した表情が、ふっと緩む。

「うん……もういいよ。わたしだって…嫌な訳じゃなかったのに困った顔しちゃって。」

……え？

今……嫌じゃなかったって……

俺は脳裏に浮かぶ考えを必死で振り払う。

また、無駄な勘違いをしてしまいそうになる。

ちょっと傷つけないように言ってくれただけだ……そんなことあり得ない。

先生が教室に入ってきて、やっと俺は馬鹿らしい考えを振り切ることができた。

第十四章　果たしてスライドできるのか（後書き）

初めてのアスタリスクを使いました。まあどうでもいいけど。

第十五章　なんで受験前にインフルなんて流行んのかなー。

授業を終え、家に帰った俺は、頭痛がすることに気がついた。
寝不足かな？と一瞬思ったが、昨日は母親に急かされて早めに寝たのを思い出した。

これは……風邪？

や、ば。
試験前だぜ試験前。
しかも難関中学の。

やばばばば。やば。

こんな時期に風邪ひくな俺！
慌てて体温計を脇にぶっ刺す。
せっかく成績も上がって、良い教育をしてる評判のある難関校に志望校も変えたっていうのにさ！

おい神。どうにかしやがれ。
Ｏｈ，ｍｙ　ｇｏｄ！↑

あがいてみても、どんどん高まる体温からして望みはなさそうだ。

俺はおとなしく、布団で丸まっていることにした。

＊

数日後。
ぼんやりと目をさました俺は、ベッドの脇に積み重ねてあるレポート用紙に目を丸くした。
一枚一枚確かめてみると、すべて塾の授業内容が書いてあった。
先生たちが大好きな、『先生の特別問題』たる先生オリジナル問題までもが、美しい字で完璧にメモしてあった。
しかもよく見るとコピーではみたいだ。自筆だ。

母親に事情説明を求めると、なんと、絵那ちゃんが自分で書いて持ってきてくれたのだ、という。
絵那ちゃんはスキー企画の提案者でもあるので、俺の母親とも面識があったらしい。
何この感動的な優しさ。
もしかして、もしかして俺のこと……！
と妄想しそうなので、する前に「こんなこと、絵那ちゃんみたいな神様なら誰にでもやってる！」と自分に言い聞かせておこうか。

第十六章　言いたいことははっきり言おう！

一週間後、とりあえず俺の風邪は治った。
当然だ。このくらいの風邪、根気で治せなくてどうする。それと……ちょっと、絵那ちゃんのお陰かもしれない。
絵那ちゃんの書いた文字が隣にあると落ち着いた。しかも絵那ちゃんから貰った、まとめのレポート用紙は、塾に復帰してからしっかり役にたったのだから。これも当然だけど。
というか……俺のノートより絵那ちゃんのレポート用紙の方がはるかに分かりやすい。まさに月とすっぽんだった。
こうして、休んだくせに成績が前より上がっているという傍から見れば納得のいかない（そして本人は嬉しい）状態のまま、受験はあと5日に迫っていた。

＊

「薫一くん。」
最後の塾の日、皆よりずっと遅れて帰り支度をしていた俺に話しかけた人がいた。
振り向かなくてもわかる。
この声は……
「…絵那ちゃん」
「あのね……」
絵那ちゃんはそこで口を閉ざしてしまった。
「……」
気まずい沈黙。
「…頑張ってね、明日。」

「……」

あまりに妙な沈黙だった。
俺は、絵那ちゃんが他に言いたいことがあった気がして、気になって仕方なかった。
もし……もし『好きだよ』と言いたかったなら、言ってくれればよかったのに。
それは『頑張ってね』よりずっと、俺にとって意味のある言葉だ。
言いたかったことも気になったが、それを言わなかった理由も、同じくらい気になった。

……こんな気分で、受験なんか乗り越えられるのだろうか。

第十七章　ペンだこって中指に出来るものなんだと初めて知った恥ずかしい俺

……タイトルの意味は、ペンの持ち方がおかしいせいでペンだこが薬指などに出来てしまうから、ペンだこが中指に出来ると知らない、という意味です。

第十七章　ペンだこって中指に出来るものなんだと初めて知った恥ずかしい俺

雪が降っていた。
白く、まるで空に舞う鳥のような軽やかさで。

……かっこつけるのはもう止める。

…今日は受験だ。
皆緊張しているのか張りつめた表情をしている。
俺の母親だって例外ではなく、今朝からポケットカイロを五個以上渡してきやがった。
気持ちは分かるが…さすがに熱いって。

そんな中、余裕そうな顔をしている奴は妙に格好よく思えて、くやしい。
……俺だって自信はあるけど…周りの雰囲気に流されやすいから。
心配だ。
母親のさんざんな確認の上、俺は大勢の受験生とともに受験会場に吸い込まれていった。

＊

隣に座ったのは、高慢そうな顔をした奴だった。自信たっぷりな感じだ。
……こいつの雰囲気に巻き込まれよう。そうすればうまくいくかもしれないし…。
俺は思った。

＊

「ハイ試験終了でーす。筆記用具を置いて、解答用紙を集めてください。」

……終わったぁ……。

安堵と疲労で頭がぼうっとして、しばらく何も考えられなかった。
放心状態のまま家に帰りつき、気がついたら家の布団の中だった。
……こういう時、おのずと浮かぶのは絵那ちゃんの顔だった。
俺のベッドに寄り添って、いつもより潤んだ瞳で
「お疲れさま」
と囁き……。
昨日からずっとこんな感じの妄想を繰り返している。
昨日、絵那ちゃんに意味深長な台詞を言われてから、絵那ちゃんのことしか考えられないのだ。

明日、合格発表がある。
そこで三年間の憂いが吹き飛ばされても、今度は新しいことで悩みはじめてしまいそうだ。

第十八章　合格発表の時「やったー」って叫ぶひんしゅくな奴がいた

合格発表。
昔は「サクラサク」とか「サクラチル」とか書いた紙が封筒入りで送られてきたらしいが、今は残念ながら誰かが自分の番号を見つけて喜び跳ねる横でがっくりすることになる。

……まぁ、落ちれば、の話なのだが。
二月二日、俺はついに第一志望の合格発表に来ている。
ちなみに受験番号は６５番。
やっぱり二日に男子校の二次の面談が無い人は多いらしく、子連ればかりだ。皆落ち着きなくゆらゆらうごめいていて、まるで海藻だ。
緊張しているのは……やっぱり、誰も同じなんだなあ。
他人事のようにぼんやり考えたその瞬間、腕に鋭い痛みが走った。

「薫一……」
母親が、物凄い馬鹿力で腕を掴んでいたのだ。
「落ちても泣かないでよね……。仕方ないわよね、その時は……。1月からあんなに頑張ったんですもの――それだけで十分よ」
……落ちる、前提か。
「やめろよ、痛い。それと、俺は落ちても絶対泣かないし、それに落ちる気も無い。」
母親はびっくりして腕を放した。そして、うっすら涙ぐみながら言ってきた。
「……薫一、大人になったわね……！母さん、感動しちゃった……。

」

そんな事、母親から言われるとむずがゆく、面映ゆいのだが。

前方の人だかりから、ざわっと騒ぎが聞こえた。

あえて母親に返事はせず、慌てて前に向き直る。

係の人が引いてきたホワイトボードには、およそ２００の番号が示されていた。

前述のように泣いたり、跳ねたり、肩を叩きあったりする人々の姿がそこにはあるのだが、その人々の数が半端でないため、ホワイトボードがよく見えない。

比較的背の高い俺が少し背伸びをすると、一気に視界が開け１００番くらいまでがざっと見て取れた。

６５、６５、６５を探せ……

ひたすら番号の列を辿ってゆく。

そして……

「――あ、あった……！」

その数字を確認した俺は、呆然とその場に立ち尽くしてしまった。

母親は小声で叫ぶように

「やった、やった、やったわよ！」

と繰り返していた。

受かった……んだよな？

なんだか嬉しすぎて感情が麻痺しているらしい。

母親の抱擁を受け、父親の感激した声が聞こえ、電話ごしに塾長の

嬉しそうな声が聞こえ、気が付くと家に帰りベッドの中。

……なんだこのデジャブな状態。

第十八章　合格発表の時「やったー」って叫ぶひんしゅくな奴がいた（後書き）

デジャヴですよ（汗

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2555h/

ななほしてんとう

2010年10月10日05時58分発行